

草場古墳群2

— 第2次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一〇四集

2010

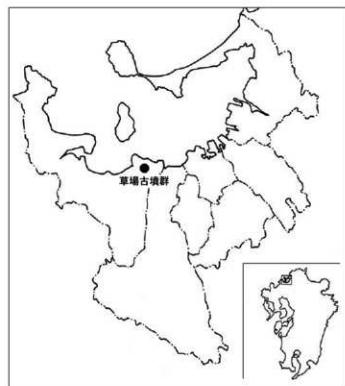
2 0 1 0

福岡市教育委員会

福岡市教育委員会

# 草場古墳群 2

— 第2次調査報告 —



遺跡番号 KSK-1  
調査番号 7320

2 0 1 0

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから東アジアとの交流が盛んに行われ、その結果として、今日の国際感覚に優れた都市として発展してきました。また市内には多くの遺跡が残され、これらを保護し後世に伝えることは私どもの勤めであります。

今回報告する草場古墳群を調査したのは30数年前のことであります。当時は調査地点から早良平野を見渡せば、古くからの集落が点在し、その周辺は水田に囲まれた長閑な農村風景が広がり、とくに室見川の西側には団地や新興住宅地もなく、豊かな自然と史跡に囲まれた地域でした。

昭和40年代は開発が盛んで文化課は多くの調査物件を抱え、十分に対応することが出来ない状況で、大学の先生方に発掘調査を依頼していました。草場古墳の調査もその中の一つで、東京国立博物館を退官されていた三木文雄先生に依頼して調査したものです。

調査の結果、方墳1基、円墳3基を確認しました。1号墳は墳丘裾に列石を廻らし、羨道の両脇の墳丘に祭祀造構があり、壺、壺、甕などの多くの須恵器が出土し、重要な遺跡であることが確認されました。遺跡の重要性に鑑み、現状保存するように三木先生が要望され、開発事業者と協議し保存されることになりました。平成4年、福岡市指定史跡として、市民に開放しています。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが亡くなられた三木先生をはじめ福岡県文化課、九州大学の先生方、地産株式会社、竹中土木株式会社、地元の方々等の調査に協力された人々に深く感謝いたします。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

# 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が故三木文雄先生に依頼して結成した「草場古墳群調査団」が团地造成工事に伴い、西区下山門において発掘調査を実施した草場古墳群第2次調査の報告書である。
2. 本書は地産株式会社と草場古墳群調査団の間に取り交わされた委託契約に基づき調査団が整理・報告を実施する計画であった。整理の途中で三木先生が亡くなられる等の諸般の事情により整理及び報告書作成することが困難になった。よって福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が国庫補助事業としてその後の整理・報告を行つたものである。
3. 本書で用いた方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は主に森・中岡・藤井が行い、その他は調査員及び調査参加学生等による。3、4号墳の石室実測図は昭和49年2月、藤井により作成された。
5. 本書に使用した遺物実測図及び製図は濱石正子・撫養久美子による。
6. 本書に使用した遺構写真は三木・森、遺物写真は松村が撮影した。
7. 本書の編集・執筆は松村が行った。
8. 本書に使用した記録・遺物類は福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。
9. 本書に使用した標高は調査時点での事実誤認があったようで相当違っていた。故に、当時の地形測量図と第3次調査の地形図等を参考に補正し、当時の実測原図の数値から4m減じた値を記している。
10. 本書に掲載した遺物は土器類だけであるが、そのほかに鉄鎌・金環・ガラス玉類が出土しているが数回の移動中に行方が不明となった。

# 本　文　目　次

Iはじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査経過	1
II 遺跡の立地と環境	
III 調査の記録	
1. 調査概要	6
2. 1号墳の調査	6
石室	9
祭祀遺構	10
列石	13
出土遺物	13
3. 2号墳の調査	21
石室	21
墳丘	21
出土遺物	21
4. 3号墳の調査	22
石室	22
石棺	24
出土遺物	26
5. 4号墳の調査	26
石室	27
6. 3・4号墳の墳丘	27

# 挿　図　目　次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2	調査区位置図 (1/2,000) 「草場古墳群第3次調査報告」より	5
Fig. 3	草場古墳群地形測量図 (1/300)	7
Fig. 4	1号墳石室実測図 (1/50)	8
Fig. 5	1号墳埴丘土層実測図 (1/50)	9
Fig. 6	漢道部土層実測図 (1/40)	10
Fig. 7	列石及び遺物出土状況実測図 (1/30, 1/100)	11
Fig. 8	1号墳出土土器実測図 (1) (1/3)	12
Fig. 9	1号墳出土土器実測図 (2) (1/3)	14
Fig. 10	1号墳出土土器実測図 (3) (1/3)	15

Fig.11	1号墳出土土器実測図 (4) (1/3)	16
Fig.12	1号墳出土土器実測図 (5) (1/3)	17
Fig.13	1号墳出土土器実測図 (6) (1/6)	18
Fig.14	1号墳出土土器実測図 (7) (1/8)	19
Fig.15	1号墳出土土器実測図 (8) (1/8)	20
Fig.16	2号墳石室実測図 (1/50)	21
Fig.17	2号墳出土土器実測図 (1/3)	22
Fig.18	3号墳石室実測図 (1/50)	23
Fig.19	4号墳出土状況実測図 (1/10)	24
Fig.20	5号墳石棺実測図 (1/20)	24
Fig.21	6号墳出土土器実測図 (1/3, 1/6)	25
Fig.22	7号墳石室実測図 (1/50)	27
Fig.23	3, 4号墳トレンチ土層実測図 (1) (1/40)	28
Fig.24	3, 4号墳トレンチ土層実測図 (2) (1/40)	30
Fig.25	3, 4号墳トレンチ配置・遺構図実測図 (1/150)	31

## 図 版 目 次

PL.1	(上) 古墳遠景 (東より) (中) 1・2号墳調査前全景 (東より) (下) 3・4号墳調査前全景 (東より)	PL.8	(上) 3号墳祭祀土器出土状況 (北西より) (中) 4号墳石室調査状況 (南東より) (下) 4号墳石室調査状況 (東より)
PL.2	(上) 1号墳浜道部 (南より) (下) 1号墳玄門 (南より)	PL.9	1号墳出土土器
PL.3	(上) 1号墳左側壁 (東より) (下) 1号墳東側列石 (南より)	PL.10	1~3号墳出土土器
PL.4	(上) 1号墳東祭祀土器出土状況 (南より) (中) 1号墳東祭祀土器出土状況 (南より) (下) 1号墳西祭祀土器出土状況 (南より)	PL.11	1号墳出土土器
PL.5	(上) 1号墳西側埴丘 (南より) (下) 2号墳石室全景 (南東より)	PL.12	1号墳出土土器
PL.6	(上) 2号墳石室全景 (南東より) (中) 2号墳石室全景 (北西より) (下) 3号墳遺物出土状況 (東より)	PL.13	1号墳出土土器
PL.7	(上) 3号墳浜道部 (南東より) (中) 3号墳左側壁 (南西より) (下) 3号墳石棺 (南西より)	PL.14	1~3号墳出土土器

## はじめに

### 1. 調査に至る経過

当該地は当時の地権者早良鉱業株式会社から昭和47年に事前開発願いが提出され、それに伴い福岡市教育委員会は調査団を結成し、調査に着手した。申請地は樹木に覆われ鬱蒼としていたので、その伐採に手間取り発掘調査を開始する前に調査費用が不足する事態に陥った。以後原因者早良鉱業と教育委員会が話し合いを重ねたが協議が整わなかったので一旦は調査を中断した。(第1次調査)

翌昭和48年、新に開発主体となった地産株式会社から事前開発願いが提出され、発掘調査に関する協議が行はれた。文化課では多くの調査案件を抱え、直ちに調査に着手することは困難であることから、文化課文化財主事三島格氏の尽力により東京国立博物館を退官され、聖心女子大学などで教鞭を執っていた三木文雄氏を調査団長とする新たな組織が結成され、夏休みを活用して調査を再開することとなった。(第2次調査)

### 2. 調査の組織

(発掘調査)

**調査団長** 三木文雄 (元東京国立博物館)

**調査員** 藤後二郎 茂木雅博

**調査参加者** 中岡和浩 (東海大学学生) 聖心女子大学学生 共立女子大学学生

東京学芸大学学生

福岡市教育委員会文化課 課長 清水 義彦 文化財主事 三島 格

文化財係長 三宅 安吉

事務担当 岩下 卓二 調査員 松村 道博

(肩書きなどは調査当時のものである)

**調査委託者** 地産株式会社

(整理調査)

**整理総括** 福岡市教育委員会 埋蔵文化財第2課 課長 田中 寿夫

調査第1係長 杉山 富雄

**庶務** 福岡市教育委員会 文化財整備課

**整理担当** 福岡市教育委員会 埋蔵文化財第2課 主任文化財主事 松村 道博

**整理補助** 福岡市教育委員会 埋蔵文化財課 技能員 濱石 正子 摂養 久美子

### 3. 調査経過

昭和48年 (抄録)

7月26日 前年に伐採を終えていたので、その後に繁茂した下草の除草作業から調査を開始。

7月28日 除草作業及び1/50現況地形測量図作成。

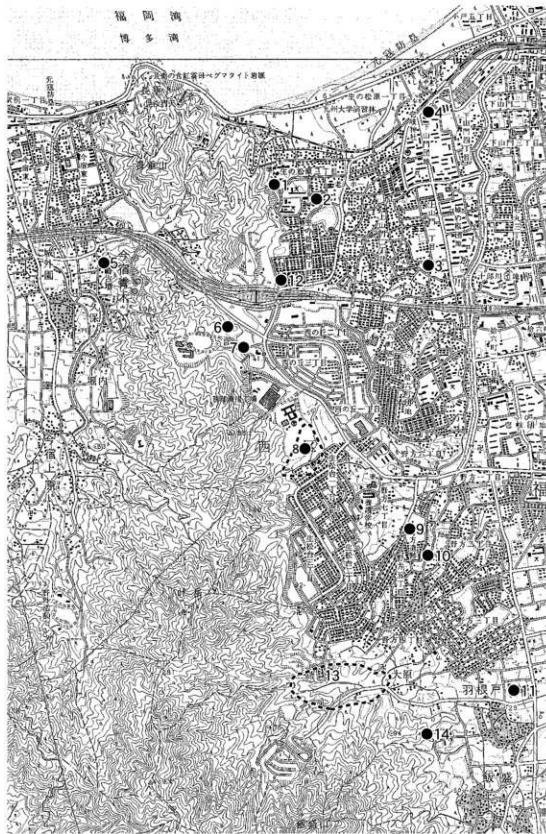
7月29日 発掘作業開始。1号墳は北側を病院職員寮建設の地下で約3mの崖面になり、石室は東西方向に輪切りされていた。石室内を掘り下げ、内部に天井石が落下している状況を確認する。

7月31日 1号墳の頂上から埴丘に東西方向にトレンチを入れる。頂より西側で須恵器が纏って出土。

- 8月1日 1号墳の天井石を清掃、写真撮影。2号墳中央にトレンチ設定。西側で提瓶、壺が出土し、後に小石室を確認。3号墳は石室が一部開口していたので室内を掘り下げ、鉄斧、刀子、鎧が出土した。
- 8月2日 1号墳は落下來して天井石を取り除くと北側に開口していると考えていたのが、逆に南側に通道を確認
- 8月4日 1号墳の漢道両側を拡張すると墳丘から葺き石と供獻土器が出現。西側の土器群は上下層に分離でき、二時期のものか。
- 8月13日 1号墳の東側墳丘で須恵器出土。2トレンチで墳丘裾を確認。
- 8月24日 3、4号墳のくびれ部にトレンチを設定。2つの古墳を分離する溝状遺構はなく、同一古墳と思える地山地形を検出。双円墳あるいは前方後円墳の可能性が強まる。
- 8月25日 作業遅延の現状と今後の調査について文化課と協議し次のような結論を得た。  
 ①調査期間は一応、当初契約の9月10日までとする。  
 ②残った作業は時期を見て再開する。  
 ③3、4号墳が前方後円墳なら保存を働きかける。  
 ④保存のためににも両古墳の墳端をおさえる。  
 ⑤1号墳は全掘するが、3、4墳は完掘できない。
- 8月26日～9月15日 1号墳は漢道の両側に葺石がめぐり、墳丘中腹に祭祀の須恵器群を検出する。墳丘及び石室の実測を開始する。3、4号墳の墳丘裾にトレンチを設定し掘削する。Jトレ南端より24mの地点で溝が消滅、わずかな隙間を残して墳端は下方へ落ち、5トレに続くことを確認。4号墳が前方部らしき形態をとっていることは確か。
- 9月26日 1号墳大甕取り上げ。内部に大石3個が投入されていた。E6の中にも滑石、拳大以上の石数個があり、このため口縁部が割れその破片が内部に落ち込んでいる。
- 10月1日 機材撤収して調査を終える。文化課など関係先にご挨拶に伺う。

\*この調査経過は三木先生、轟氏の調査日誌を元にまとめたものであるが文責は松村にある。また、福岡県文化課 児玉真一氏、福岡市文化課 矢津義明、山崎純男氏には種々お世話になった事が記されている。なおこの草場古墳4基は学校用地として福岡市教育委員会が買収し、平成4年3月福岡市指定史跡として斜ヶ浦瓦窯跡と共に現地保存されている。

調査番号	7320	遺跡略号	KSK-2
調査地地籍	福岡市西区下山門1709	調査面積	古墳4基
調査期間	昭和48年7月27日～昭和48年10月1日		



1. 草場古墳群 2. 斜ヶ浦瓦窯 3. 梶六町ツイグ道路 4. 下山門道路 5. 園崎古墳 6. 広石古墳群A群  
 7. 広石古墳群B群 8. 広石古墳群I～IV群 9. 野方中原道路 10. 野方久保進跡 11. 羽根戸原C道路  
 12. 草刈古墳群 13. 羽根戸古墳群A～P群 14. 羽根戸南古墳群

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

## II. 遺跡の立地と環境

早良平野の南には背振山系から展開する山塊が横たわり、筑前と肥前とを分断している。背振山系の一つ金山（967m）から派生した丘陵は北へと続き飯盛山、岳岳等の丘陵を形成し、さらに海岸部まで長垂山が伸び早良平野と今宿平野とを分ける低丘陵となる。

早良平野での埋蔵文化財調査は数多くなされ歴史的環境について各々の報告書で詳細に詳述されているので、ここでは室見川下流域西側の状況について簡略に記す。岳岳等からのびる低丘陵や早良平野の西側裾部あるいは洪積台地には旧石器時代から数多くの遺跡が分布している。吉武遺跡群や羽根戸遺跡ではナイフ形石器、繩目器が出土している。縄文時代早期、前期の遺跡では微高地に立地する松木田遺跡が上げられる。焼や集石遺跡、土坑などが検出され、燃糸文土器や石器などが遺構に伴う多量に出土し、この時期の良好な遺跡である。丘陵中腹や尾根上に占地する広石古墳群や笠間谷古墳群などの調査に伴って押型文土器が出土している遺跡が多く認められる。これらは遺構に伴うことは無く、出土も少量といった特徴が認められる。前期は沖積地の四箇遺跡や田村遺跡などから土坑が確認され、轟B式土器や曾畠式が出土している。中期には田村遺跡や四箇遺跡22次調査地点から瀬戸内系等の土器が見られその交流が伺われる。中・後期には吉武遺跡群で46基の貯藏穴が調査されている。底から植物種子が出土しているドングリピットがある。有田遺跡では60基の貯藏穴（土坑）が確認されたが、洪積台地に占地することから有機物は検出されていない。四箇遺跡A地点では後期の埋甕があり、包含層からは西平式・三万田式土器と多数の石器が共伴している。

縄文晩期の突宍文土器期から弥生前期にかけての遺跡は沖積地、微高地、洪積台地に展開する。有田遺跡では台地頂部にV字状環濠が確認され、台地縁に位置する有田七田前遺跡では集落から移出したと考えられる包含層から半島系の土器が出土している。石丸古川B遺跡では低湿地の微高地上に集落が営まれ、拾六町ツイジ遺跡、四箇遺跡などでも大陸系石器、木製農耕具あるいは矢板列など水田稲作農耕に関連する遺構・遺物が見られる。後期にはさらに遺跡は拡大し有田遺跡や原遺跡では住居址、甕棺墓が確認されている。低地の下山門敷田遺跡、砂丘上の姪浜遺跡にも集落が営まれている。吉武高木遺跡は弥生時代から古墳時代各期の撲点集落があり甕棺墓は1000基以上が出土し、区画墓や埴丘墓から青銅器類も多数出土している。終末期から古墳前期にかけて大規模な道路が調査されている。野方中原遺跡では住居址が幾重にも重複する環濠集落が確認され、石棺からは後漢鏡が出土している。南東に位置する野方久保遺跡では約70基の古墳時代前期の住居跡が調査され、人口増加が窺われる。古墳中期には吉武遺跡や西新町遺跡、有田遺跡から陶質土器や半島系土器が数多く出土し注目される。湯納遺跡・拾六町ツイジ遺跡からは木製農耕具や建築材、白・容器等が出土している。墳墓では砂丘に立地する藤崎遺跡の方形周溝墓から三角縁神獸鏡、五島山古墳からは神獸鏡・銅鏡が出土している。吉武遺跡には中期の帆立貝式の葺石・円筒埴輪を巡らす斜溝古墳や方墳、後期の円墳も20数基見られる。金武・羽根戸・野方地域の西側丘陵部には中期から終末にかけての群集墳が多数分布している。これらの古墳からは鉄滓を供獻する例が多く見られ、広石南古墳群や群のように鍛冶工具を副葬する例もあり製鉄工人との関連が窺われる。福岡市域内では珍しい豪飾古墳もある。浦江1号墳、吉武K7号墳で奥壁に巻きき文を描いている。

古代の遺跡跡は早良郡に比定される有田遺跡、公的施設等が推定される吉武遺跡などがあるが近くでは南東300mに斜ヶ浦瓦窯跡がある。「伊貴作瓦」「警固」などの文字瓦が見られ、鴻臚館に使用されたとされる。東800mには城ノ原廢寺があるが詳細は不明である。

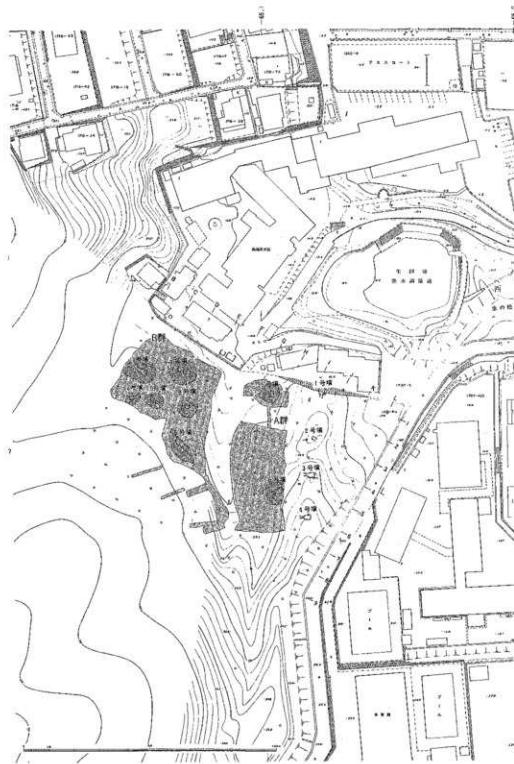


Fig. 2 調査区位置図 (1/2,000)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査概要

本古墳群は長垂山から伸びる丘陵の尾根線上や裾部に位置する群集墳である。昭和48年の第2次調査当時には西側丘陵に樹木が生い茂り内部を踏査することは出来なく、尾根線上の4基と西裾部の1基、計5基の古墳群と考えられていた。昭和64年の第3次調査で西側丘陵、谷部から新たに古墳が発見され12基の古墳群となった。

古墳は南側から北へ延びる丘陵頂部上にはほぼ等間隔に並び、北から南に1号墳～4号墳となる。4号墳の南側は削平され、標高30.0mで平坦となっている。北側は病院施設建設で先端部が切削され垂直な崖面となる。

調査は埴丘が切削され石室も輪切りされていた1号墳から着手した。丘陵の先端部にあり、標高23mの位置にある。南に開口する横穴式石室の方墳で、漢道の一部を除いて天井石も崩落し、漢道両側には列石・墓石が散在した。南東部は丁寧で、南西部は疎らな状況を示す。漢道の両側墳端はほぼ直ぐ伸び南西部、南東部で直角に折れ東西16.7mの方墳と推定される。漢道の両側には甕、壺、坏類等が置かれ、埴丘祭祀が行はれている。埴丘の全体の規模は明らかでないが、確認できた範囲で東西16.7mを測り、南北も同規模と推測される。

2号墳は歪な長椭円形の地形を示すが封土は確認できなかった。両側に1、3号墳が築造され、円墳状を呈したもので見かけより小規模な古墳であろう。頂部に設定したトレチで横穴式石室の腰石を確認したものの、墳丘の全面調査はしていない。トレチでは表土の直下は地山が現れること、盛り土はすべて欠失しているので大きく削平されていることは確実であるが、古墳を埋る周溝や地山整形などもトレチ内では確認できなく、その規模を明らかにすることはできなかった。

3、4号墳は南北に並立し、2基の円墳とも考えられる古墳である。しかし両古墳を別ける馬蹄形溝等の施設はなく、西側の地山整形、東側の細い溝、3号墳の北側の埴丘裾が丸く半円状を描くことなどから同一古墳と判断することも可能で双円墳か否か明らかではないが、その可能性がある古墳である。しかし、両古墳の墳頂部の高さが2 m以上あるなど不自然な点もある。3号墳は調査時にすでに西側に一部開口していた横穴式石室である。天井石が遺存し、玄室内には土砂の流入は少なく、空洞となっていたことから副葬遺物は土器、鐵鏡、金環、ガラス玉等がわずかに出土したにすぎない。漢道の南西裾部近くから転石を用いた石棺1基を確認した。石棺内部からの副葬遺物は認められない。4号墳の調査も古墳の地形を確認するだけのトレチ調査に留めた。第1次調査では石室平面図の作成だけを行っていたが、調査期間中は時間的余裕がなかったので翌年に実測作業を実施した。長方形の玄室で西に開口する円墳である。墳頂部の3号墳との比高差は現状で1 mを測るが、4号墳は墳頂部が削平されているので本来は3 m前後の差があったものと思われる。

#### 2. 1号墳の調査

今回の調査で唯一石室と埴丘の調査を実施した古墳である。ただ埴丘、前庭部の一部の調査は行っていない。古墳は北側へ延びる丘陵の尾根線の先端に位置し、標高23mを測る。北側は病院施設建設により土取りされ石室が輪切りされた状態で露出し、恐らく埴丘の半分以上が削平されているもので、主体部は主軸を尾根線と同じ北北東にとる、両袖式の横穴式石室である。この古墳群の中で唯一南側の尾根の高い方へ開口する古墳である。石室の遺存状況は悪く天井石は漢道部に2石が残るのみで、玄室天井石から奥壁にかけて取り除かれている。石室内は天井石、壁石などの崩落した石材で埋

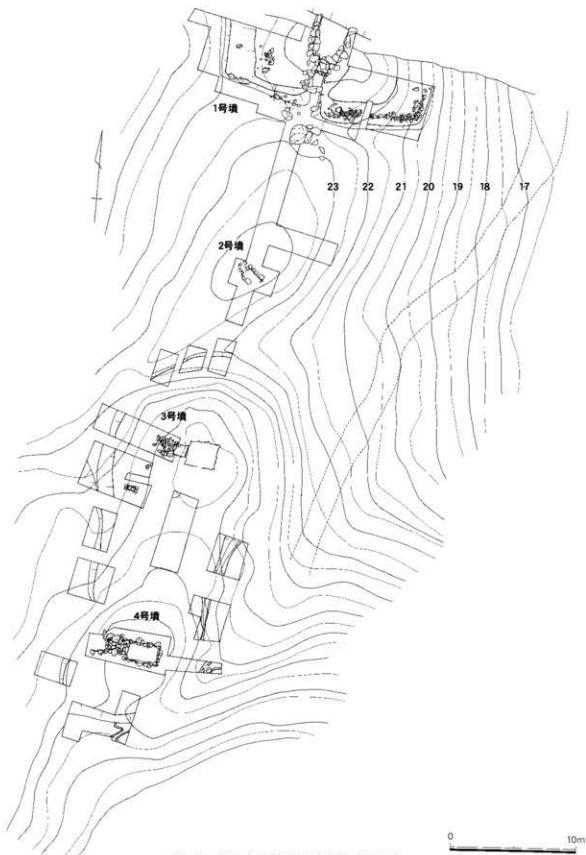


Fig. 3 草場古墳群地形測量図 (1/300)

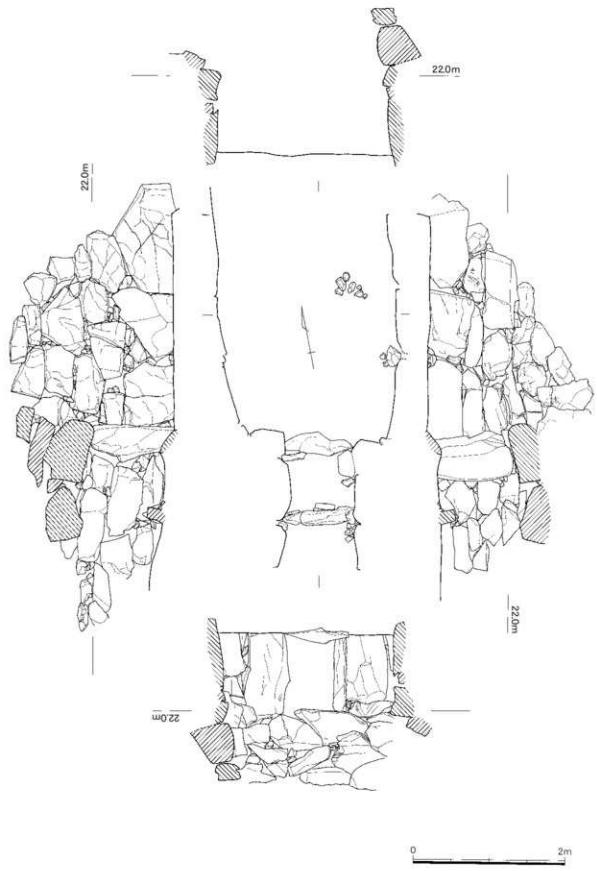


Fig. 4 1号墳石室実測図 (1/50)

もれていた。当初は地形や石室遺存状況から北側に開口すると考えていたが、石室の内部土砂を除去すると南側に開口することが判明した。石室は床面まで搅乱され、土器類や装身具、鉄鎌、刀子などが少量出土したが原位置を保つものはない。敷石も床面にはわずかに拳大の石が残るのみであり、全体に施されていたか明らかではない。

**石室 (Fig. 4)** 玄室は長方形で最大幅229cm、羨道部に向かって幅を狭め、南端幅190cm、現存長325cm、残存高215cmを測る。羨道幅84cmで墓道に向かってわずかに開き南端幅106cm、高さ96cm、長さ176cmの規模である。玄室の右側壁には大きめのや、扁平な板状石を横長に3石据え、腰石としている。その上面はほぼ平坦に揃え、その上に小振りの横長の石を据え、横目地を通して二段積み上げている。更にその上に二、三段丸味のある石を継積している。壁面は軽く内傾する。左腰石も右壁と同様に扁平な板状石を横長に3石据えるが、その上面は右壁と異なり凹凸があり、その窪みを小縫で埋め、床面から80cmの位置で平坦にするが目地は通らない。右袖石は2石で構成され、奥に玄室から続く幅65cmの袖石を継位置に配置し、左袖石との間の床面には楕石を据える。この楕石と奥の袖石に接して、幅55cm、高さ100cm以上、厚さ17cm前後の大きな板状石を羨道に張り出して継位置に配し、楕石を支えている。羨道には2箇所に楕石を設けている。玄門部には上縫が尖る面を上に向ける横長の1石を据え、その南75cmの位置に2石を組み合わせ平坦な面を上に向したものである。大きさは袖石部で幅87cm、南端で106cm、高さ110cmを測る。三段積み上げて墓道へ繋がる。墓道は幅120cm、深さ85cm、長さ2mほどで埴丘基、前庭部へと続く。堆積土層 (Fig. 6) は自然に堆積した状況を示し、層序は以下のとおりである。①暗褐色土、②暗褐色土で少し黒味を帯び石屑多く含み、わずかに須恵器の破片も認められる。③暗赤褐色土で石屑を多く含む。④赤褐色土で拳大の石を含む。

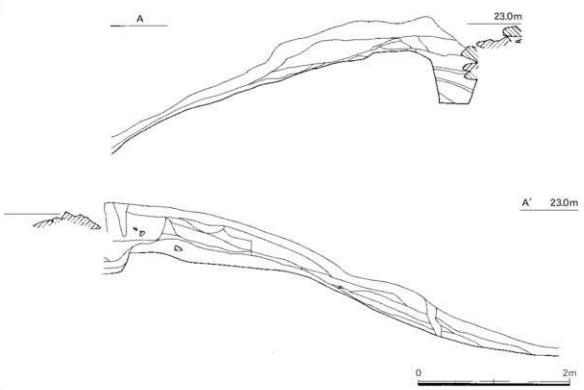


Fig. 5 1号墳埴丘土層実測図 (1/50)

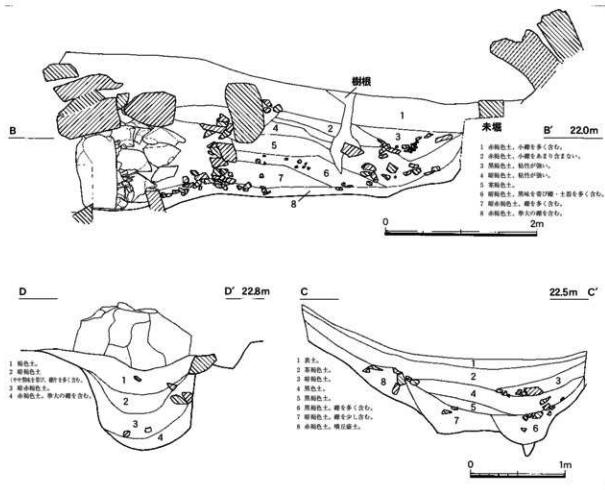


Fig. 6 美道部土層実測図 (1/40)

祭祀遺構 (Fig. 7) 美道部の両側、墳丘上の東側と西側に各々 1箇所検出された。西側祭祀遺構は美道の西3.5m、墳丘の中ほどに位置する。表土下10cm、標高22.5m前後にあり、少し傾斜が緩やかな地点に当たる。北側に寄って4個体の甕が墳丘に直に据えられた状態で出土した。甕の上半部は内部に落ち込んだものや、あるいは周辺に散乱していた破片が多い。接合の結果、口縁部までかなり接合したことから、墳丘に置かれていたことが窺われる。甕を置くための掘り込みは確認できなかった。甕と甕の間には転倒した高杯や壺、甕の破片が散乱している。

東側祭祀遺構は墓道の直東側、墳丘据面側、列石上端に接するような地点に位置する。西側より一段低く、土器の分布範囲は 2 m × 0.8 m で上下二段に置かれていたと推測される。左側の高い位置に大甕 (E6) を据え、それを中心として高杯、甕類を配する。大甕の内部には拳大の石が確認できた。意図的に置いた可能性があるが、底に密着していないく、少し浮いた状況で出土している事から甕が壊れるとさに流入したものであろう。東側には一段低い位置に須恵器の横瓶 (E10)、小型の甕 (E12)、高杯 (E11) がある。甕、横瓶は口縁部を上に向け、高杯は横軸した状態で出土した。この上下の出土状況は第一回は「二時期の墳丘祭祀」と考え、第二回は「下層は古墳築造に伴い祭祀を行った、上層は墳丘祭祀を行ったとの二通りの理解が成立する。祭祀土器の設置レベル及び出土面から推察すると「築造に伴う祭祀+墳丘祭祀」と考えたい。(森氏は下の須恵器は最初の墳丘祭祀で、その後それらの須恵器の上に盛土をして祭祀を行った「二時期の墳丘祭祀」、更に墳丘自体も二時期にわたる築造と考えていた。)

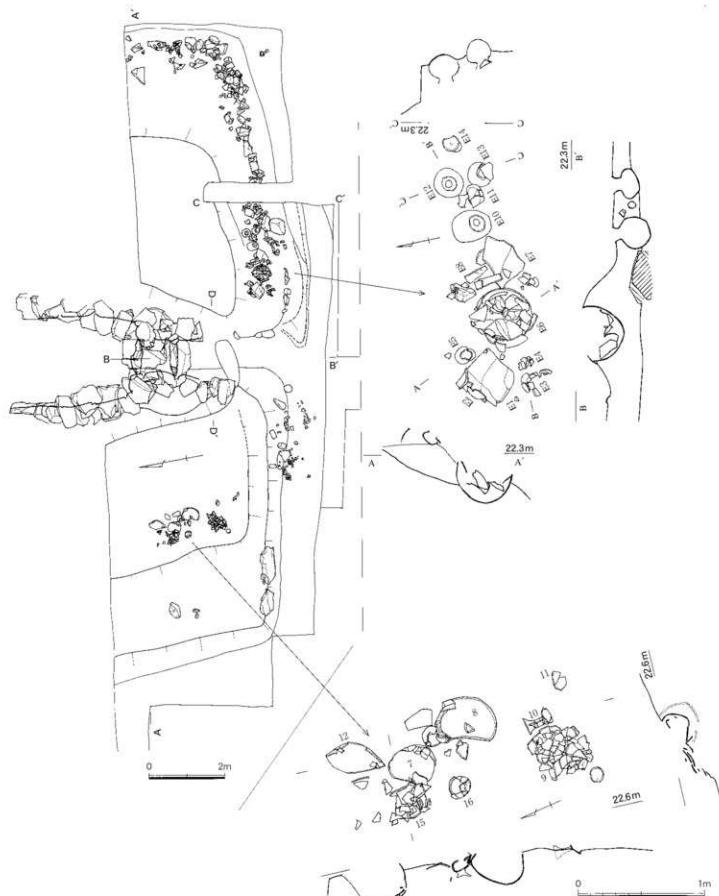


Fig. 7 列石及び遺物出土状況実測図 (1/30.1/100)

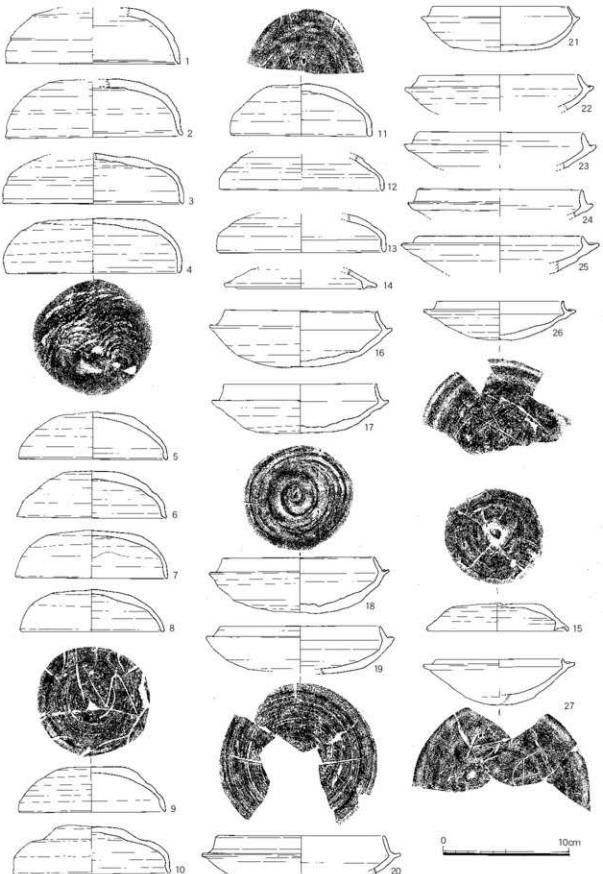


Fig. 8 1号墳出土土器実測図(1) (1/3)

**列石 (Fig. 7)** 墓道の両側に展開する列石である。当初は葺石ではないかと思われていたが、配石が一部に限られて、全体を覆う類のものでは無いこと、同一古墳群の7号墳、10号墳からも列石が残る例があることから、列石とした。列石は南辺から東辺の裾部にかけて良好に遺存している。墳丘の裾より少し墳頂に寄った位置で、墳裾に沿いながら幅20cm～40cmの広がりをもち、南東隅で逆し字状に屈曲する。用いている石は5～20cm大の角礫で大小混在し、数段積のところや、一段積のところ、なかには全く列石がないところもあり、総じて乱雜に敷き詰めた状況を示す。南辺は墳丘裾を墓道から東へ直線的に延び7mの位置で直角に北側に折れ、2.7m地点まで続く。さらに北側へ続いているが幅1.4mが未調査、その北側は崖面になっているので何處まで続くのか、或いは消滅するのか明らかにすることはできなかった。列石の土層を観察すると墳丘盛土の赤褐色土の肩部に土留状に三石を積み上げている状況にある。

墓道西側の列石は小振りの礫を數個配するだけの簡易なものである。南西隅の近くには長辺が1m弱の横長の大振りの石を2個横に並べている。そのほかには配石は認められない。出土した土器は墓道、前庭部、南辺墳丘裾の黒褐色土から多量に出土しているが、いずれも大小に壊れた状態の破片であり、原位置を保った土器はなく墳丘から転落した遺物の可能性が強い。

前庭部東側に検出されたは第1号墳の封土がある程度崩落した段階で掘り込んでいる。南側の肩部は調査区外へ広がり、全体の形状は明らかではなく、その性格も不明であるがその位置関係から見ると墓道と思われる。墳丘裾部の遺物は溝上部の黒色土、黒褐色土から多く出土していることや、これらの土器が2号墳に伴うとは考え難く、1号墳の築造時ではなく追跡時の溝と考えられよう。

#### 出土遺物 (Fig. 8～15)

玄室・羨道部・前庭部出土土器 (Fig. 8.9 1～38) 1～15は須恵器環蓋である。1～4は口径13.9cm前後、器高4.4cmを計る、比較的大きい一群である。1は口径13.7cm、器高4.4cm、焼成は良好で黒褐色～暗灰色を呈する。天井部は平坦で2/3が回転ヘラケズリで体部との境に浅い不明瞭な段を持つ。体部は緩やかに開き、口唇部内面に浅い段を持つ。2、3もほぼ同様である。4は平坦な天井部で体部との境は不明瞭で、体部は内済し口唇部は丸く収まる。天井部は2/3が回転ヘラケズリ、他はナデ調整である。天井部内面には同心円の當て具痕が残る。5～13は天井部が丸味をもち、体部との境が不明瞭な一群である。5は口径11.8cm、器高3.7cmを計る。天井部の中央部は回転ヘラケズリで他はナデ調整である。口縁部はほぼ垂直になり口唇部は丸く収まる。7、8もほぼ同様である。6は天井部と体部の境が不明瞭で沈線状となり、口唇部端が尖る。9～11は口径11.7～12.4cm、器高3.6～4.1cmを計る。天井部は中央部が尖り、体部にかけて内済し口縁部は直立、口唇部は丸く収まる。9の天井部には窯印がある。11～13も同様な口縁部破片である。14、15はかえりを有する蓋である。15は完形品で口径9.0cm、器高2.2cmを計る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良く紫帯びた濃灰褐色である。天井部は平坦でヘラナデし体部との境に粘土がはみ出たままである。また天井には「×」の窯印が浅く刻まれる。18は口縁部の一部を欠損するがほぼ完形で口径12.0cm、器高4.4cm、底部外面は2/3がヘラケズリ、その他は回転ナデ、内底面には円弧状の當て具痕が明瞭に残る。胎土には砂粒を少し含み焼成は良好で暗灰色を呈する。16の内底面にも幾重にも重複した當て具痕が残る。21は口径10.6cm、器高3.6cmを計り、口縁部の立ち上がりは低く、底部は平坦で器高低い。22～24は口縁部の立ち上がりが低い一群で浅い坏である。26は小型品で口径10.0cm、器高3.1cmを計り、口縁部は内傾して立ち上がる。底部外面には窯印があり、調整は底部中央部はヨコナデ、他は回転ナデである。27は底部が尖り、立ち上がりがさらにも低くなる。底部外面には直線と曲線からなる窯印がある。28～30は須恵器の高杯である。28は有蓋高杯で坏部の体部から口縁部を欠損する。坏底部には同心円の當て具痕が残

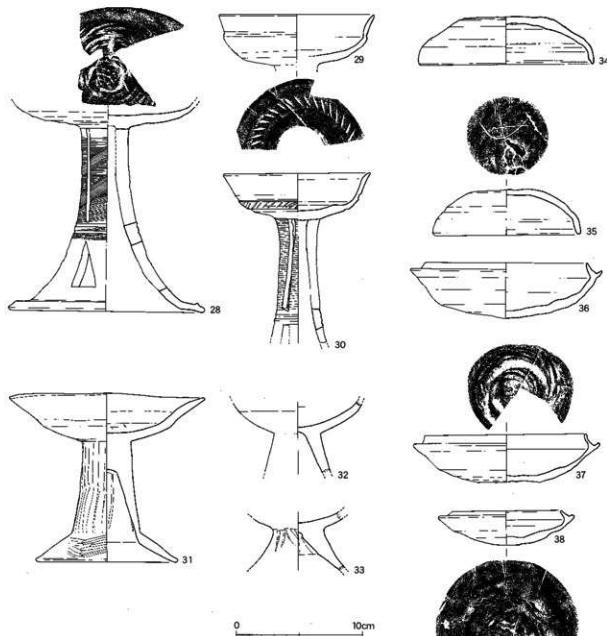


Fig. 9 1号墳出土土器実測図 (2) (1/3)

る。脚部は2条の沈線を境に上に長方形、下に三角形の透かしを持つ。上半にはカキメ、坏部はカキメとヘラケズリ、接合部はナデ調整である。29は無蓋高杯で脚部を欠失する。30は口径11.6cm、残存器高13.4cmを計る。坏底部と体部の境に幅広の沈線を廻らしその間に範描文、脚部には沈線と坏部の境まで長方形の透かしを3箇所に入れる。31~33は土器器の高杯である。34~38は坏の蓋と身である。38は口唇部内面に浅い段、35の天井部外面上に直線と曲線を組み合わせた窯印、37の内底面に当て具痕、38にも窯印がある。80、82は玄室と埴丘から出土した破片を接合した提瓶である。80は口径10.6cm、器高25.1cm、胴部最大径20.9cmを計る。口唇部は肥厚しヨコナデ、肩部に鉤状把手を1対貼り付け、胴部の平坦面がカキメ、対側面はヘラケズリの後ナデ調整。焼成は甘く黄褐色の部分もある。82は少

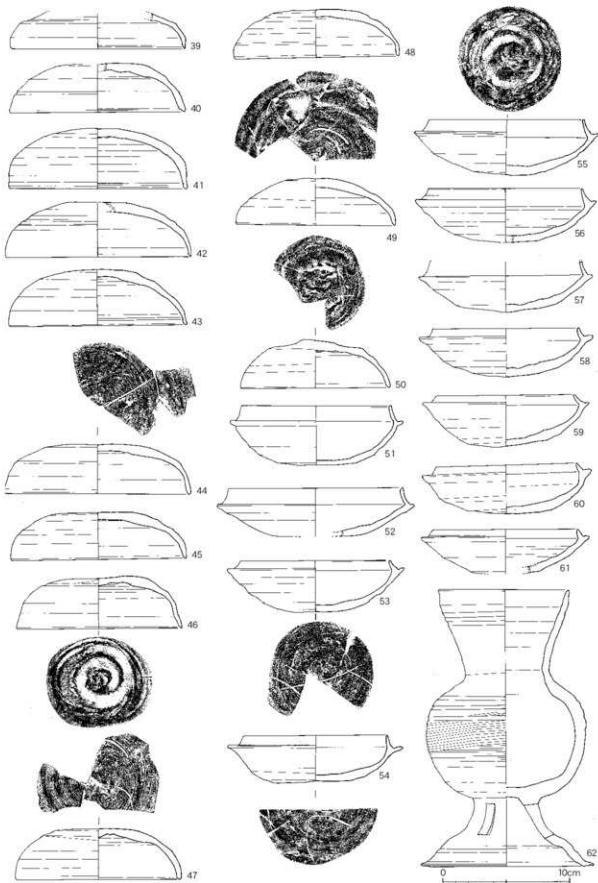


Fig. 10 1号墳出土土器実測図 (3) (1/3)

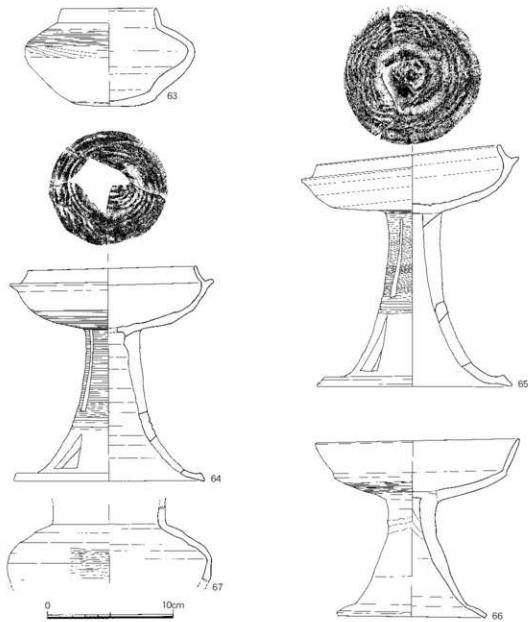


Fig. 11 1号墳出土土器実測図(4) (1/3)

し小型品で把手はない。両面から側面にかけてカキメ、側面はカキメの後ナデ調整である。

埴丘東側出土土器 (Fig.10~11,14,15) 東祭祀遺構から出土した遺物及び、この東側埴丘、埴丘壠の土器群を一括して述べる。

祭祀遺構出土土器 (49.51~53,63,66,87,88,90,91,100,103) 66は土師器、他は須恵器で环、高杯、短頸瓶、提瓶、横瓶、甕がある。49は坏蓋で天井部の2/3を回転ヘラケズリし体部との境は不明瞭で丸い口縁部となり口唇部も丸く収まる。天井部外面には窯印を有する。51~53は坏身で口縁部の立ち上がりが直立に近いものから内傾し低いものもある。63は口縁部を少し欠損するがほぼ完形品の短頸瓶である。胸部上半が最大径で口縁部はすばり僅かに内傾する。底部は平底で底部脇までヘラケズリ、肩部から頸部までカキメ、内面はナデ調整である。87、88は小型の甕である。87は口縁部を少し欠損するがほぼ完形品で、口縁部は焼成時の歪みが残る。口径14.5cm、器高21.9cm、胸部最大径19.7cmあ

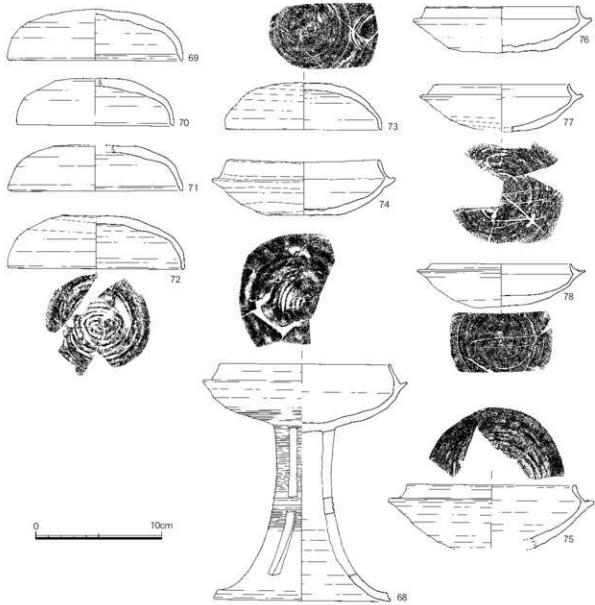
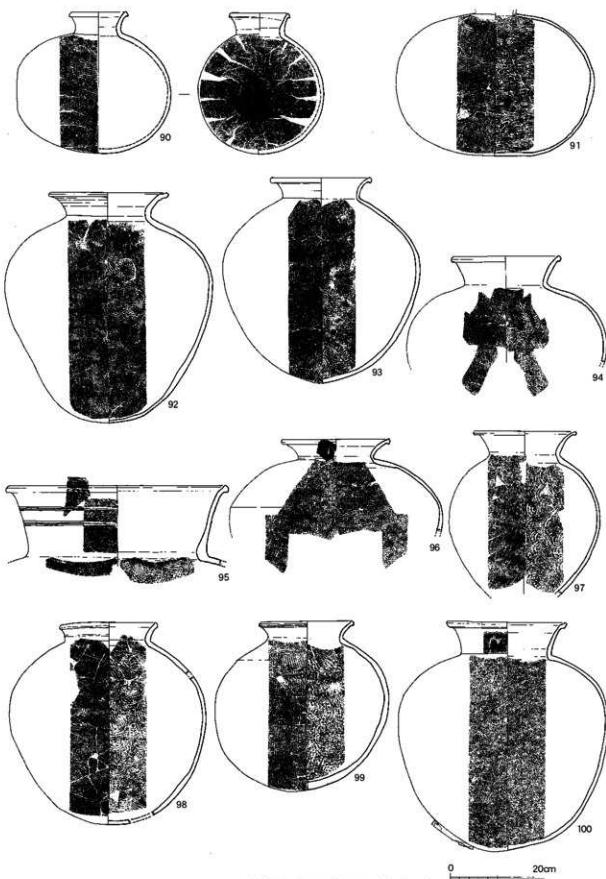
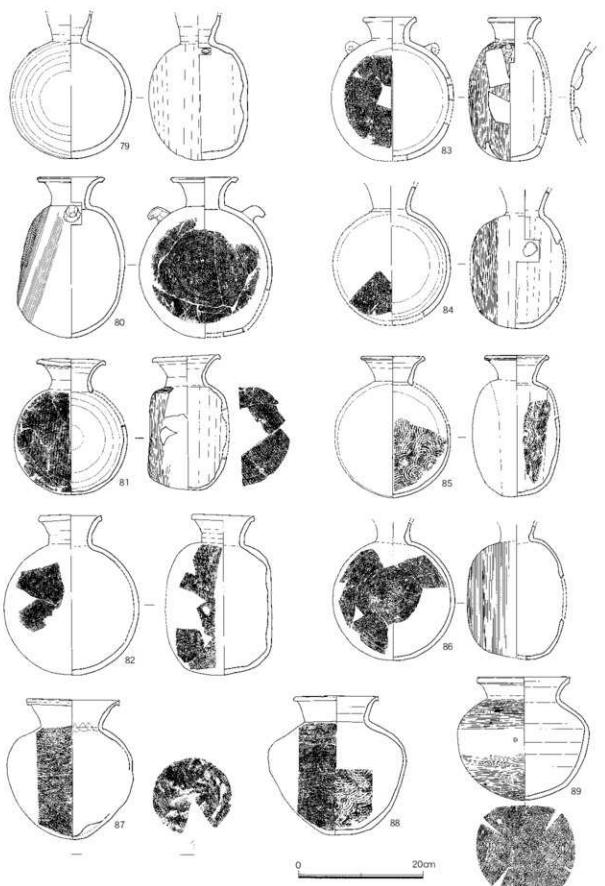


Fig. 12 1号墳出土土器実測図(5) (1/3)

る。肩部は下半が継の刷毛目、上半は平行タタキの上から刷毛状工具を強く押さえヘラケズリ状の痕跡を残す。口縁部は端部を肥厚させ、外面を平坦にする。頸部内面には接合痕が残る。88も小型の甕であるが肩部が強く張り底部は丸くなる。底部から肩部下半は偽格子、平行タタキ、カキメ状調整が荒く螺旋状に廻り、肩部上半はカキメ調整、内面には青海波文が残る。肩部には数箇所に須恵器の破片が付着し、その部分と肩部に自然釉が認められる。90、91は横瓶、90は完形品で口径13cm、幅32.7cm、器高30.2cm。外面は平行タタキの後、縦位のカキメ状調整である。91は口縁部を欠損する。100は大型の甕で口径25.3cm、肩部最大径44.7cm、器高49.1cmを計る。肩部外面は縦位の平行タタキで上半部はカキメ状のナデ、底部から下半部にかけて4、5条の継線状となる。内面は平行な當て具痕で上半は外面のタタキと同様な模様となる。頸部外面には「N」の窯印を有する。103は平底の軟質土器である。平底の底部から球形の肩部、短く外反する口縁部となる。端部を肥厚させ中央部を窪める。外面は格子目タタキの後、肩部上半をナデ削す。内面は丁寧なナデである。66は土師器の高杯。



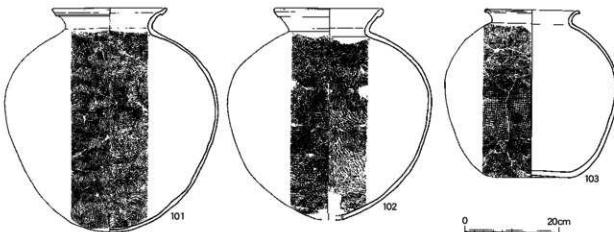


Fig. 15 1号墳出土土器実測図 (8) (1/8)

口径16.1cm器高13.6cm、脚はハの字開き、内面に絞り痕が残る。

墳丘出土の土器 (Fig.10,11,13,14,15) 須恵器である。39~48は壺蓋である。39~42、46は口径14cm前後で口唇部に段もしくは沈線を有する。43は口唇部は丸く取まり、内面に沈線、天井部外面に窓印がある。46の天井内面に當て具痕が残る。47、48、50は口唇部が丸く取まる一群で、47、50の天井部外面上に窓印を有する。54~61は杯身で54、55は口縁部の立ち上がりが直立に近く、54は外底面上に窓印、55は内底面上に當て具痕がある。56、57は口縁が内傾、58~61は口縁部の立ち上がりが低く内傾する。62は脚付盃で2/3ほどは遺存である。口径10.4cm、器高21.7cm、胴部最大径12.5cm、脚部に長方形の透かしを3箇所に設け口縁部に2条、胴部に3条、脚部に1条の沈線を施す。胴部下半はカキメ、他はナデ調整である。焼成は良く黒褐色を呈する。64、65は二段透かしの高杯である。透かしは2条の沈線を境に下には三角形、上に長方形、脚部から杯底部にカキメ調整を行う。79、80、84、85は提瓶である。79は頸部から口縁部を一部欠損するが他は遺存する。平坦面から側面、凸面にかけてヘラケズリの後ナデ消す。肩部に鉗状に粘土を貼り付けている。凸面の胴部には径6cmの粘土板を貼り付ける。また胴部下半には自然釉が点々と付着する。85はほぼ同様の器形であるが把手ではなく平坦面の胴部にはカキ目が残る。95~99は蓋である。95は頸部から口縁部が外に開き立ち上がる大蓋の口縁部破片で、口径47.5cmを計る。頸部に2条の沈線を廻らし、その間に波状文を描く。胴部外面は平行タタキ、内面は青海波の当て具痕が残る。96は胴部が強く張り、97は倒卵型の胴部で頸部を強く外反させ口唇部を肥厚させる。調整は96と同じ。頸部外面に100と同様な窓印を刻む。98は球形に近い胴部に外反する短い頸部で口唇部を肥厚させる。胴部外面はカキメ状調整を荒く行きタタキ痕を消す。内面には青海波文が残る。99は球形の胴部で、98と同様な調整。

墳丘西側出土土器 (Fig.12,13~86, Fig.14~92~94, Fig.15~101,102) 出土した土器は土師器も含まれるが示したのは須恵器だけである。69~73は蓋である。天井部はヘラケズリ、体部から内面にかけてナデ調整である。69~71は口唇部内面に浅い段をもたらし、71、72の口唇部は丸く取まり、72の天井部外面に當て具痕、72の天井部外面に窓印がある。74~78は杯身である。74は口縁部の内傾が弱く、口径12.1cm、器高4.2cmを計る。75は内底面上に當て具痕がある。77、78は縁部の内傾が強く低い。外底面上に窓印がある。101、102は中型の蓋である。101は口径24.5cm、器高47.8cmを計る。

他に刀子2、鉄鏹3、不明鉄器3、ガラス小玉（ブルー）31が出土しているが行方不明である。

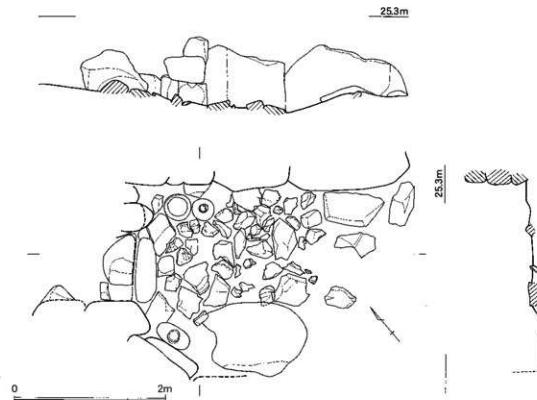


Fig. 16 2号墳石室実測図 (1/50)

### 3. 2号墳の調査

南北方向のトレーニングにより確認した古墳である。丘陵の尾根線上に立地し、北側を1号墳築造により限られ、南側も同じく3号墳により限られた歪な長楕円形の平坦部に位置する。標高24mの頂部にあり、大きく削平され、墳丘の盛土はない。

石室 (Fig.16) 主軸を南東~北西にとる両袖の横穴式石室である。規模は幅60cm、現存長195cm、高さ30cmを測る小型の石室である。石室の遺存状況は悪く奥壁、天井石もなく、側壁から羨道部にかけての腰石だけである。右側壁に二石と羨道部に二石が遺存するが、右側壁の玄門部附近の石は外側に開いており、提瓶が側壁に接して出土していることから本来の位置と推測した。その東側は敷石が消失していることや掘り込みが深いことから本来の位置を保っていない部分がある可能性が強い。左側壁は奥に横長の大きめの石を据え、その手前に柱状の石を縦置位置に置く。袖石との間に小振りの石を数段積み上げる。床面には数cm~20cm前後の角礫を敷き詰めるが、疎らでかなり凹凸が見られる。遺物は左側壁近くで蓋、蓋石各々1点、右側壁近くで提瓶1点の完形須恵器が副葬されている。

石室と羨道の仕切に扁平な横長な櫛石を配する。両側に一段に築いた側壁があるが本来の位置かは不明。羨道幅35cm、高さ20cm、現存長27cmを測りさらに北西に延びる。

墳丘 トレンチ調査で、墳丘の全面調査は実施していない。トレーニング内では表土の直下は地山の赤褐色土になる。古墳を廻る周溝や地山整形、あるいは盛土も認められずその規模は不明である。

### 出土遺物 (Fig.17)

石室内から4点の須恵器が出土した。いずれも床面から出土した須恵器である。1は須恵器の杯身で口縁部の一部を欠くがほぼ完形品だが歪である。天井部はヘラケズリ、他はナデ調整である。口径13.4cm、器高3.7cmを計る。平坦な天井部から丸い体部にほどに稜をもち、直立気味の口縁部となる。

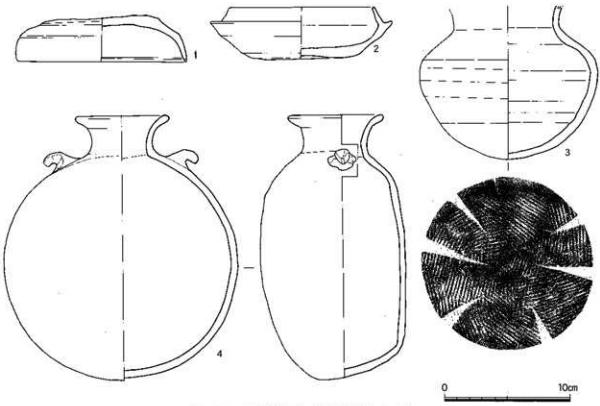


Fig. 17 2号墳出土土器実測図 (1/3)

口縁部内側に鈍い段を有し天井部となる。2は壊蓋で口径11.5cm、器高4.2cmを計る。胎土、焼成は1とほぼ同じ。平坦な底部から緩やかに開き蓋受け部となり、内傾して立ち上がり、口縁部となる。底部外面は中心が壅み、ヘラナデ、平坦部はヘラケズリ、底部内面は当て具痕をナデ消し、他はヨコナデしている。3は小形壺で口縁部を欠損する。胴部最大径は上半にあり14.1cmを計る。胎土には白砂粒を多く含み、焼成は良好、暗灰色ないし黒褐色である。底部外面には木目がある平行タタキ痕が明瞭に残り、内面には同心円の當て具痕が微かに残る。4は口縁部と耳の一部を欠損するがほぼ完形品の提瓶である。胎土には少量の白砂粒を含み、焼成良好で灰褐色から黒褐色を呈する。口径7.6cm、器高20.8cm、胴部最大径18.8cm、胴部厚11.4cmを計る。一面は丸く、裏面はヘラケズリして平坦、側面は1/3がヘラケズリ、肩部には退化した把手を貼り付ける。

#### 4. 3号墳の調査

尾根線上に位置する古墳で直径約15m、高さ3 mを測る円墳である。西側の谷部に向かって開口し天井石まで完全な姿で残る遺存状態の良好な石室である。羨道の一部と石室天井部の一部に盜掘坑が観察され石室内には土砂が流入していた。墳頂部に天井石の一部が露出している。諸般の事情で調査は石室内の調査と墳丘確認のためのトレンチ調査だけに留った。

##### 石室 (Fig. 18)

主軸を西北西-東南東にとる両袖の横穴式石室である。石室は全長445cm、玄室の規模は奥幅196cm、前幅179cm、左幅212cm、右幅220cm、高さ237cm、羨道は奥幅86cm、前幅65cm、高さ108cmを測る。玄室は奥壁の幅が前幅より15cm広く、長さも左壁が若干短いがほぼ正方形である。奥壁には高さの異なる二枚の腰石を据え、二石の高低差をなくすため大小の転石を充填し上端を平坦に整え、横長の石

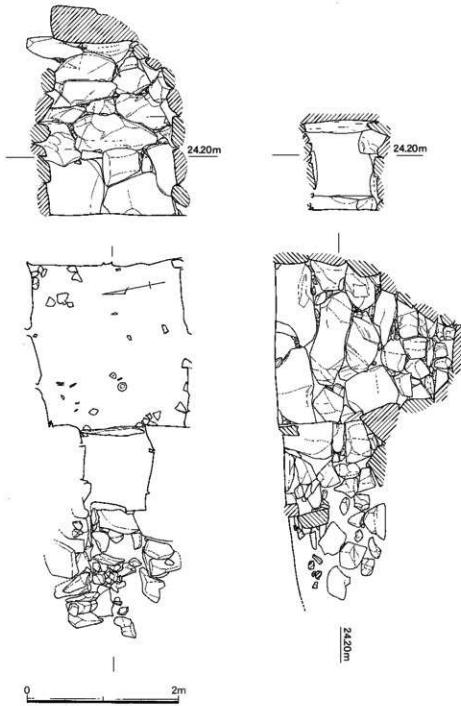
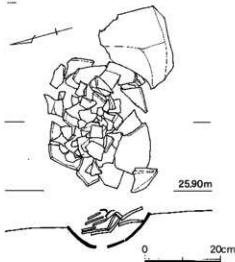
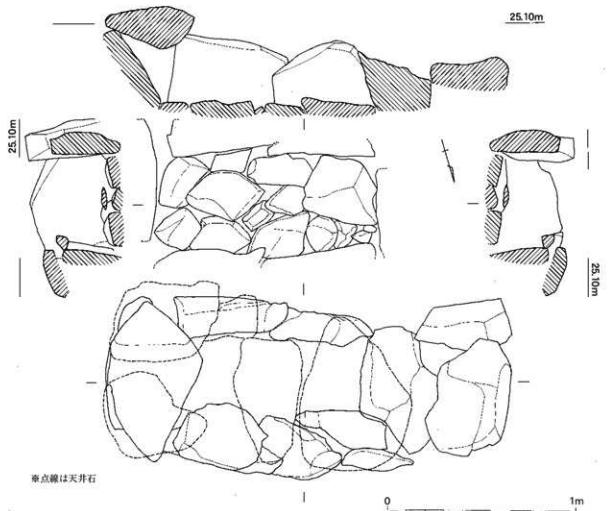


Fig. 18 3号墳石室実測図 (1/50)

を据える。この石まではほぼ垂直であるが、この上から順次、同様な積み方をし、持ち送りを強めて天井石に至る。右側壁の腰石は横長の1mを超す大きな二石を組み合わせ、床面では幅を狭め凹凸のある方を下面にし、上面が一直線になるように構築している。上面を平坦にした結果、床面近くでは二石の間に略三角形の空間が開いている。本来は石が充填されていたものであろう。腰石の上には120cm×40cmを測る横長の大石を中心で据え、両側にやや小振りの転石を配し、隙間に小石を詰め安定させている。一、二段目は横目地が通っている。三段目は大きさの異なる石を三石積み間を小石で充填し、目地が通らなくなる。四段目以上は小礫を積み上げ天井石となる。天井石近くには目地が通る箇所もある。左壁の腰石は三石で構築され、上部は右側壁と同様な構築である。羨道には二箇所に樋石が設けられている。第一樋石は玄門から西へ約1mに位置する。幅20cm、長さ45cmの角張る石と同様な二石を組み合わせている。樋石に接して板状石の閉塞石を立てる。長さ50cm前後で、上端が玄室側へ傾く。第二樋石は玄門に接して羨道に少し入った位置にある。中央部が

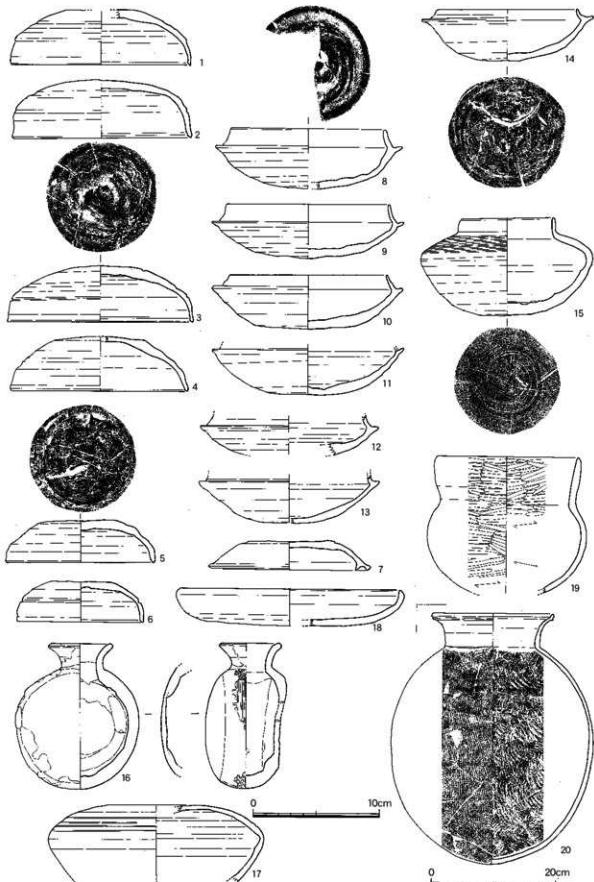


厚く両端が細い一石で構築する。高さは26cmを測る。玄門には幅65cm以上、厚さ31cm、高さ73cm以上の四角い一石を立て、その上と天井石との間に扁平な石を数石積み上げる。右側壁は玄門の次の石組みまでは比較的丁寧に構築するが、その西側は粗雑な積み方である。

美道部の右、第3トレンチ北東隅の墳丘上に須恵器の壺が潰れた状態で出土した(Fig.19)。底部から胴部にかけて据えられた状態で出土し、破片の大部分はその中に落ち込んでいた。掘り込みは確認できなかった。壺1個体のみの出土だけであるが、墳丘祭祀と考えられる。

#### 石棺 (Fig.18)

墳丘の南西部第4トレンチの北側で検出した箱式石棺で転石を用いた小規模なものである。主軸を北西—南東に取り、内側の規模は111cm×54cm、深さ32cmを計る。側壁は各々2石、木口1石、蓋石は3石を横架し、西木口には蓋石の上



に長軸に平行に2石を重ねている。東木口は外側に大きく倒れ、側壁との間に隙間が生じ、蓋石も東側にずれている。床面には敷石は認められない。他は遺存状態が良好であるが、副葬品はない。

#### 出土遺物 (Fig.20)

20は石棺の近くで出土したが他是石室内からの出土である。18、19は土師器、他は須恵器である。1~7は須恵器の杯蓋である。1は口径14.8cm、器高4.3cmを計り、天井部2/3は回転ヘラケズリである。天井部と体部の境に浅い段を有し、内湾する口縁部で、口唇部外側は尖り、内面に不明瞭な段をもつ。2、3は同様な大きさであるが天井部が丸みをみち、体部との境に沈線が廻る。口唇部は丸く收まり、内面に稜をもつ。2の天井部内面には同心円の當て具痕をナデ消している。5はほぼ完形品で口径11.8cm、器高3.3cmを計る。天井部2/3を回転ヘラケズリ、胎土には砂粒を多く含み、茶褐色を示し焼成は良好である。天井部に窯印を施す。口縁部の器壁は厚く端部は少し外に開き丸く取まる。6は壺類の蓋、口径10cm、器高3.2cmを計る。天井部2/3を回転ヘラケズリし天井部と体部の境に沈線状の浅い段を廻らし、内湾する口縁部となる。口唇部外側は尖り、内面に浅い段をもつ。胎土には砂粒を含むが精良で焼成もよく暗灰色である。7はかへりを有する杯蓋で口径10.5cm、器高3cmを計る。8~14は須恵器の杯身である。8は口径12.4cm、器高4.8cm、底部外面は回転ヘラケズリ、体部から内面にはナデ調整である。丸く深い底部から立ち上がり。受け部から口縁部は少し内傾して立ち上がる。内底面には同心円の當て具痕が残る。9は口径13.0cm、器高4.3cm、底部外面は回転ヘラケズリ、体部から内面にはナデ調整である。体部は浅く、口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。10は口縁部の内傾が強く直線となる。12は口径11.2cm、器高4.1cm、底部外面は回転ヘラケズリ、体部から内面にはナデ調整である。受け部から内傾して低く立ち上がり口縁部となる。外底面には窯印がある。15は短頸蓋一部欠損するがほぼ完形品である。胴部上半に最大径をもつ扁平な胴部で直立する低い口縁部となる。口径7.2cm、胴部最大径13.6cm、器高7.7cmを計る。胴部下半は回転ヘラケズリ、上半はカキメ調整のあと回転ナデ調整である。外底面には窯印がある。16は完形品の小型の提瓶である。口径5.1cm、胴部径9.6cm、器高11.5cmを計る。横倒して胴部の丸い面を上にして焼成したと思われ、側面全体に白灰色の自然釉が丸い面全体を覆い、釉滴も見られる。調整は全体に粗雑で平坦な胴部にはヘラケズリ、タタキ痕が残り、灰白色、側面は黒褐色を呈する。17は平瓶の胴部破片である。一方に寄った胴部と頸部との貼り付け部には櫛状工具痕が残る。18は土師器の皿で口径17.4cm、器高2.9cmを計る。内外面ともヨコナデで、胎土は精良で焼成よく淡明橙色である。19は小型丸皿で底部を欠損する。口径11.1cm、胴部最大径12.5cm、現存高8.7cmを計る。球形に近い胴部に少し内済して立ち上がる口縁部となる。胎土は精良で焼成も良く、赤褐色となる。頸部に縱方向の刷毛痕が微かに残るが、口縁部内面から外面にかけて横方向の研磨を施す。20は第3トレンチから出土した墳丘祭祀の蓋である。胴部は1/2、口縁部は1/3ほど遺存し、口径17.8cm、胴部最大径27.5cm、器高40.4cmを計る。長胴に外反し、肥厚した口縁部を貼り付ける。器壁は薄く6mm前後の厚みである。胴部外面は縱、斜め方向のタタキ、さらに胴部上半に数条を単位とする沈線が約3cm間隔で、途切れ途切れに4条廻る。口縁部はヨコナデ、胴部内面には青海波文の當て具痕が残る。胎土には砂粒をあまり含まず焼成は良好で紫を帯びた茶褐色である。他に刀子8、鉄鎌18、鉄器1、鉋1、鉄斧1、ガラス小玉（ブルー）8、水晶切子玉1、金環1が出土しているが行方不明である。

#### 5. 4号墳の調査

尾根線上の基部に位置し石室上半部～天井部が削平になり、封土がなく地山が露出していた古墳である。南側は急激に立ち上がり、その上の丘陵は削平され平坦になっていたが、本来は急

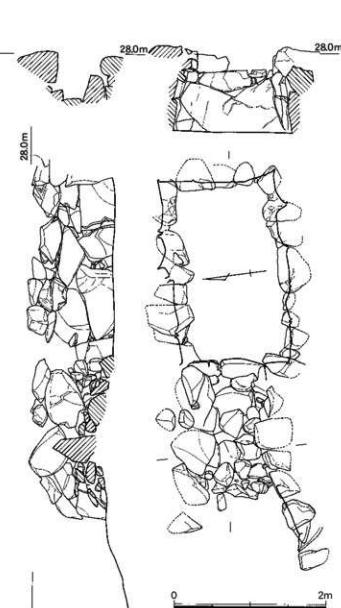


Fig. 22 4号墳石室実測図 (1/50)

左側壁の腰石は小振りで幅40cm～90cm、高さ50cm前後の大小様々な石を組み合わせるので縦、横方向ともに目地が通らない。二段目も同様な軽石を腰石の凹凸に合わせて構築している。上面は斜め上に横目地が通る。床面には敷石は確認できなかった。

羨道と玄室との境には二個を組み合せた櫛石がある。その外側には拳大から人頭大の櫛を羨道部全体に一段～数段積み上げ、中には柱状石を縦位置に置いて閉塞しているものも観察される。そのため羨道部の状況は不明な点が多い。

#### 6. 3・4号墳の墳丘調査

3・4号墳については別個の円墳であるのか双円墳・前方後円墳であるのか、いずれかの確証を得られなかつたが、一応双円墳の可能性もあるので一括して述べる。

Aトレンチ (Fig.23) 墳丘北側に設定したトレンチである。南端から13mの位置に幅1.45m、深さ

激な立ち上がりがそのまま続いているものであろう。またこの古墳群はこれ以上に南には広がらなかつたものと推測される。前年に一部室全清査を行った古墳で、今回は石室の実測調査と墳丘確認のためのトレンチ調査を実施した。石室は3号墳と同じく西側の谷部に向かって開口する両袖の横穴式石室を内部主体とする。石室内には石材が落ち込んだ状態で石室を実測したようで不明な点が多い。

#### 石室 (Fig.22)

主軸を西北西～東南東にとる両袖の横穴式石室であろう。石室の全長451cm、玄室の規模は奥幅154cm、前幅146cm、左幅241cm、右幅247cm、高さ115cm、羨道には数段の閉塞石が残り詳細な規模は不明であるが、幅は約89cm～100cm前後、長さ211cm、高さ51cmを測る。石室は奥壁の幅が前幅より5cm広く、長さも右壁が若干長いがほぼ長方形を呈する。奥壁は幅125cmを測る一枚の腰石を据える。左下隅は内側にすばり、側壁との間に三角形の空間が生じ、そこを角縫で充填している。上面はV字状に産み、その産みに厚さ24cmの板状石を載せ上面を平らに保ち、さらにその上に同様な板状石を載せて平坦になるよう構築している。

左側壁の腰石は小振りで幅40cm～90cm、高さ50cm前後の大小様々な石を組み合わせるので縦、横方向ともに目地が通らない。二段目も同様な軽石を腰石の凹凸に合わせて構築している。上面は斜め上に横目地が通る。床面には敷石は確認できなかった。

羨道と玄室との境には二個を組み合せた櫛石がある。その外側には拳大から人頭大の櫛を羨道部全体に一段～数段積み上げ、中には柱状石を縦位置に置いて閉塞しているものも観察される。そのため羨道部の状況は不明な点が多い。

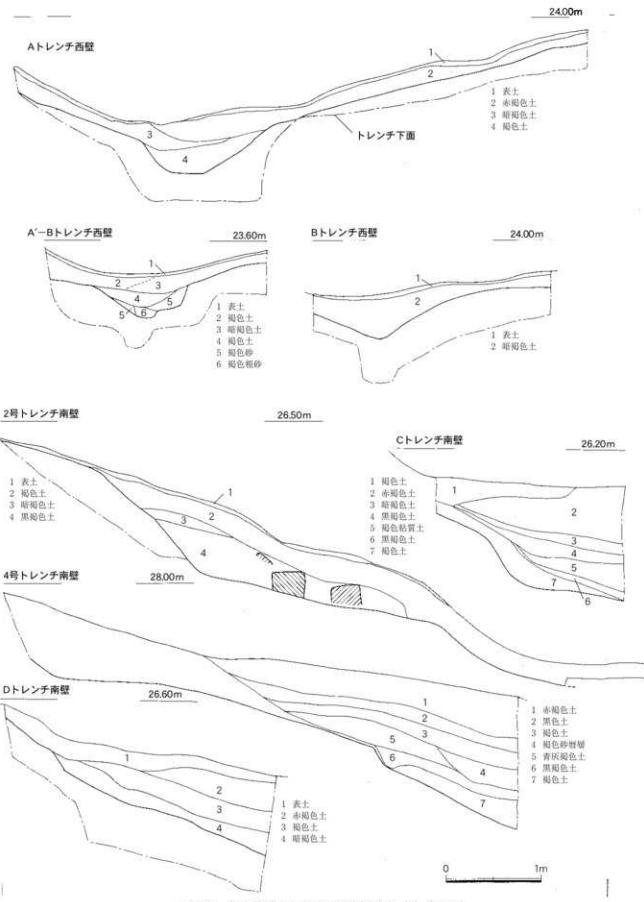


Fig. 23 3,4号墳トレンチ土層実測図 (1) (1/40)

0.26mの溝を確認した。トレーニングに直交し、南北に延びる丘陵を切断する。南側の傾斜は強く、北側はなだらかな傾斜を示す。覆土は小石を含む褐色土である。

**A'-Bトレーニング・Bトレーニング (Fig.23)** 墳丘西北側に設定した2本のトレーニングである。トレーニングの中央部が僅かに深い程度の浅い溝である。特に外側の肩部は不明瞭である。表土下に褐色土・暗褐色土が浅く堆積している。暗褐色土からは須恵器破片が出土している。

**2号トレーニング (Fig.23)** 羨道・墓道の西側に設定したトレーニングである。トレーニング西端から東へ1.5mの位置で墳丘端を確認できた。中央部分は角礫を含む黒色土が観察されるが、掘削した面が本来の墳丘面か否か明らかではない。

**4号トレーニング (Fig.23)** 3、4号墳との境に位置するトレーニングである。トレーニングの東側は墳丘盛土である砂礫を含む褐色土であるが、いくつかの層に分けられよう。西部は墳丘盛土が墳丘標に再堆積したものであろう。しかし、その層は上から赤褐色土、黒色土、褐色土、褐色砂質土、青灰白褐色土、黒色土、褐色土の各層に分れ層状となり、墳丘盛土とも考えられるが、その位置関係を考慮すると無理がある。

**1号トレーニング (Fig.24)** 丘陵の尾根部に位置するトレーニングである。3、4号墳の中間にあり、周溝あるいは地山造成が行われているかの確認のためである。南側2/3は表土直下で花崗岩バイラン土混じりの岩盤である。墳丘盛土はすべて失われ地山の傾斜面が現われる。この傾斜面の裾は4号墳石室より北へ11.5mの位置にあり、南側への距離5.5mと大きな隔たりがあることから円墳とするには疑問がある。ただ北へ0.5mの地点にも傾斜変換点が認められ、その地点を墳丘標と考えれば直径13.5mの円墳とも考えられる。3号墳寄りはやや汚れるある花崗岩砂礫層を含む黄褐色土、暗褐色土、黑褐色土となる。暗褐色土が古墳の盛土、黒褐色土は土坑の覆土と思われる。

**C・Dトレーニング (Fig.23)** 3、4号墳の西側墳丘標に位置するトレーニングである。Cトレーニングの土層は花崗岩バイラン土を基盤面としその上に赤褐色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色粘質土、黒褐色土となる。赤褐色土までは新しい時期の堆積、それ以下は墳丘盛土が二次堆積したものであろう。Dトレーニングもほぼ同様の堆積であるが東側0.5mのところまで墳丘盛土を確認できる。

**Eトレーニング (Fig.24)** 4号墳道南西に位置するトレーニングである。赤褐色土が厚く堆積し(170cm)その下に褐色土、暗褐色土が薄く堆積している。赤褐色土は新しい時期の堆積でその下は墳丘土の再堆積であろう。

**F・Gトレーニング (Fig.24)** 4号墳の南墳丘標に位置するトレーニングである。2本のトレーニングを設定し、墳丘標が確認されたので拡張して調査を実施した。F区西壁は調査区の中ほどから北側へ傾斜し周溝状造構が観察できる。土層は赤褐色土が厚く堆積しているが、C、Dトレーニングでは新しい時期の堆積土であると理解しているので墳丘標、溝とするには疑問な点もある。Gトレーニングでは花崗岩バイラン土を基盤層とした掘り込み(溝?)の一部が確認できた。

**5号トレーニング (Fig.24)** 石室の裏側、東側に位置するトレーニングである。墳丘盛土はすでに消失し、墳頂部の石室構築面はすでに基盤の花崗岩バイラン土が露出している。土層は花崗岩バイラン土が二次堆積した上から黄褐色砂質土、褐色粘質土、赤褐色粘質土、暗褐色土となる。東側は傾斜が急であり本来的に盛土を行ったのは墳丘上部のみで大部分は地山整形によるものであろう。墳丘端は平坦に均し、部分的に溝状を呈する箇所も見られる。

**J・Hトレーニング (Fig.24)** 3、4号墳の鞍部東側に位置するトレーニングである。調査区の中央部に東西へ延びる溝状構造を確認。二段に掘り込まれ、Jトレーニングでは内側が深く外側が浅い。北端で幅75cm、深さ15cmを測り、南へいくに従い幅を狭め溝は消滅し段差だけとなる。Hトレーニングでは

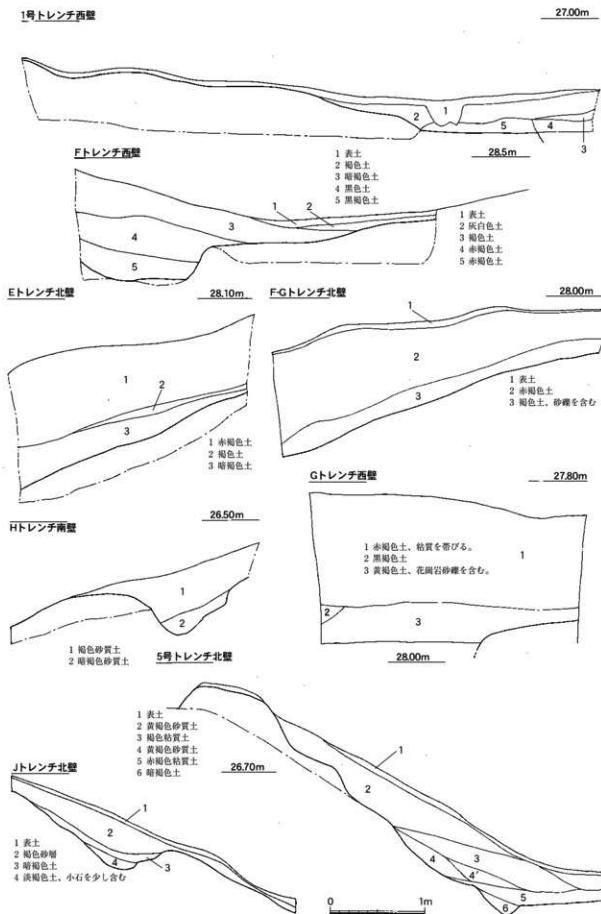


Fig. 24 3,4号墳トレンチ土層実測図 (2) (1/40)

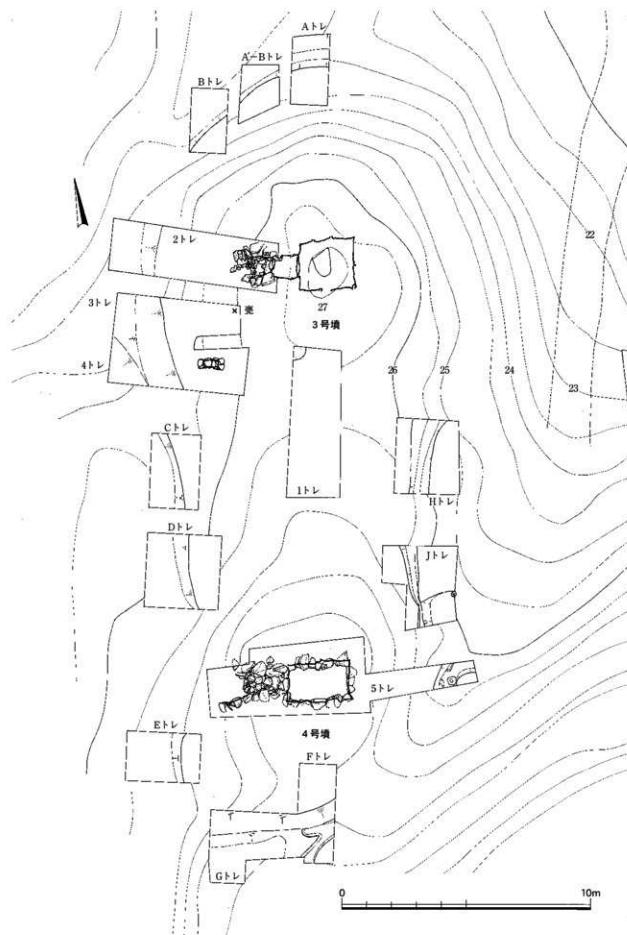


Fig. 25 3.4号墳トレンチ配置・遺構実測図 (1/150)

溝の形が逆に内側が浅く外側が深くなり、幅も序々に広くなり120cmを測る。

3、4号墳の墳丘はトレンチ調査であり不明瞭な点もあるが、両古墳の鞍部に設定した1号トレンチでは両古墳を分離する溝などの遺構はない。3、4号墳の墳頂部では現状で1mの高低差しかないが、4号墳は石室床面から1mしか遺存していないので、本来は2m前後の比高差があったものと推測される。東側墳丘裾の日トレンチでは両古墳を廻るような状況で溝を確認し一帯的に築造された可能性も覗える。この状況は西側墳丘裾の地山造成とも共通する。この溝は4号墳の東裾にいくに従い不明瞭となる。石室の形状は3号墳が方形の玄室に細い羨道を付設しているが4号墳は長方形の玄室に同様な羨道部となり同一期の築造ではないであろう。また4号墳の遺物は確認できないので詳細は明らかではない。トレンチ調査では前方後円墳か双円墳、あるいは円墳かどうか明らかではないので、ここでは円墳2基として報告しておく。

## 小 結

今回の調査では4基の古墳を調査したが、完全に墳丘まで調査を行ったのは1号墳だけで、それも不十分なものであった。その後、平成元年西側が宅地造成され、新に7基の古墳が調査され合計12基の古墳群であることが判明した。

今回の2次調査では東側の1号から4号墳の調査を実施した。墳丘まで発掘したのは1号墳のみである。1号墳は北側が土取りされているので墳丘の全形は明らかではないが、残存している墳丘の形態や列石の状態から推測すると一辺17m前後を測る方墳と考えられる。また羨道両側の墳丘に祭祀遺構があり多量の須恵器を供獻している。墳丘裾からも多くの方器が出土しているが、これらは祭祀遺構から転落したものと考えられる。これらの土器は完全に埋まっているものや墳丘上に転がっているものもあり、数度に亘り供獻したものであろう。あるいは築造に当たり、祭祀を行ったものも含まれよう。草場古墳群の中でもこれほど大量の土器で墳丘祭祀を行っているのは1号墳のみで、丘陵頂部に位置していることから、中心的存在といえる。石室は長方形の玄室に短い羨道の付くタイプで比較的古い状態を保ち、須恵器はⅢAの時期に構築されⅣ期までの遺物もある。4号墳も同様に長方形のタイプの石室であるが、羨道が長く延びている。3号墳の石室は正方形の平面形でやや長めの羨道部となる。出土須恵器はⅢBが主体で4基の中では新しい部類に属する。

西側の3次調査では6世紀後半から7世紀初頭に構築されているので東側に位置する群はそれに先行して構築が開始され、その後徐々に西側へ拡大したものと考えられる。

終わりに

調査から37年が経過し、やっと報告書の作成を終え調査に参加した者の一人として責務を終えたよう気がした。一寸した手伝いのつもりでいたのに加え長い年月の間に記憶がほとんど消え去り、調査に関連する必要な事柄についてさえ曖昧模糊としている。当時の日誌や写真を参考に作成したので事実認証等があるかもしれないがご容赦願いたい。調査をなされた三木先生や当時調査団結成に尽力された三島格氏、事務係長の三宅安吉氏など亡くなられた関係者の方々も多く、そのご冥福をお祈りいたします。

## 図 版



調査中訪れた丸隈山古墳での記念撮影（前列中央が三木先生・1973年8月）



古墳遠景（東より）



1・2号墳調査前全景（東より）



3・4号墳調査前全景（東より）



1号墳奥道部（南より）



1号墳玄門（南より）



1号墳左側壁（東より）



1号墳東側列石（南より）



1号墳東祭祀土器出土状況  
(南より)



1号墳東祭祀土器出土状況  
(南より)



1号墳西祭祀土器出土状況  
(南より)



1号墳西側墳丘 (南より)



2号墳石室全景 (南東より)



2号墳石室全景（南東より）



2号墳石室全景（北西より）



3号墳遺物出土状況（東より）



3号墳畿道部（南東より）



3号墳左側壁（南西より）



3号墳石棺（南西より）



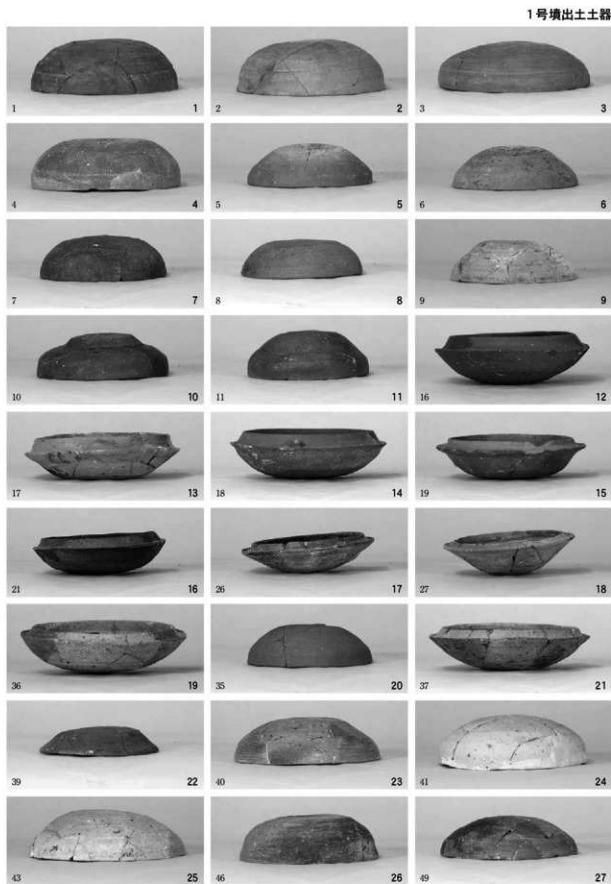
3号墳祭祀土器出土状況  
(北西より)



4号墳石室調査状況  
(南東より)



4号墳石室調査状況  
(東より)



1号墳出土土器

左下の番号は挿図番号

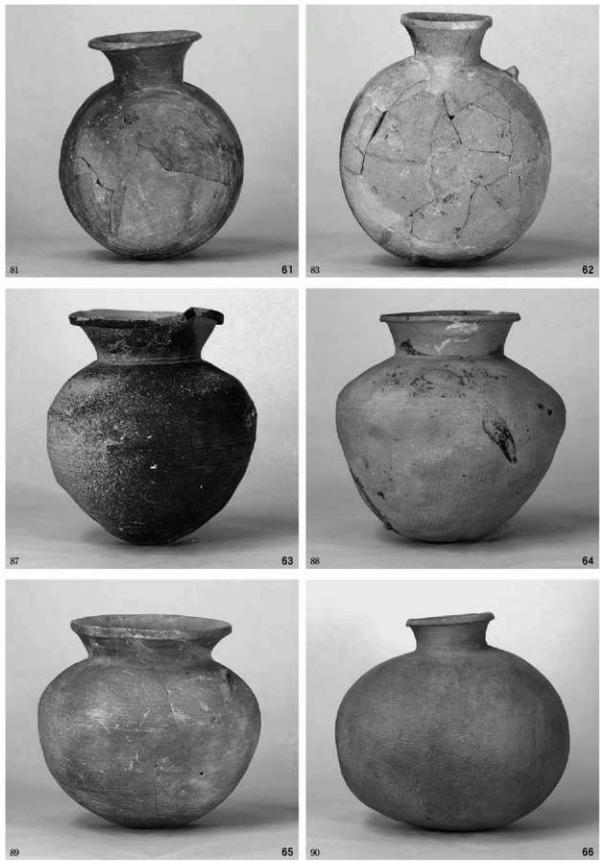
1～3号墳出土土器



1号墳出土土器



1号填出土土器



1号填出土土器



1~3号墳出土土器



101



103

74



2-3



75

76



3-20

77

## 報告書抄録

ふりがな	くさばこふんぐん に					
書名	草場古墳群 2					
副書名	第2次調査の報告					
巻次	2					
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	1104					
編著者名	松村道博					
編集機関	福岡市教育委員会					
発行機関	福岡市教育委員会					
発行年月日	20100323					
作成機関ID						
郵便番号	810-8621	電話番号	092-711-4667			
住所	福岡県福岡市中央区天神1-8-1					
ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号 (世界測地系)	東經 北緯	調査期間	調査面積	調査原因
草場古墳群	福岡市西区 下山門字草場	40135 0510	333433 1301748	19740726 19741001	古墳4基	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
草場古墳群	古墳	古墳	方墳1・円墳3 横穴式石室4 石棺1 墳丘祭祀3	須恵器・土師器 鉄器・玉類	1号墳は方墳と考えられ、墳丘の壇輪に列石 が廻り、表道の両側に壇丘祭祀がある。	

## 草場古墳群 2

## — 第2次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1104集

2010年(平成22年)3月23日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 国崎美峰堂

〒812-0053

福岡市東区箱崎1丁目20-5

TEL 092-641-8822